林羅山年譜稿（三）

鈴木健一

引用文献の略称として、以下のものを追加する。

宇野　宇野茂彦『叢書日本の思想家2　林羅山（附）林鵞峰』（明徳出版社、一九九一年）

元和元年（一六一五・慶長二十年）　三十三歳

○正月一日、歳旦詩あり。（詩集一一・一三一）

列国諸侯会不期　列国の諸侯　期せざるに会す
君軍到處悉乎夷　君が軍の到る處　悉く夷
捷書夜報今朝筆　捷書　夜報ず　今朝の筆
一著戎衣天下治　一たび戎衣を著して天下治まる

前年十月の大阪冬の陣について詠んだもの。そののち天下治まるとの徳川礼讃。四句目は、大田南畝『蘆の若葉』も引用する。〔鈴木健一「林羅山の漢詩文一面」（解釈と鑑賞、一九九二年三月）〕

※正月二十九日、養父理斎（吉勝）没。父信時剃髪し、林入と改名する。惺窩に哭詩あり。（年譜、行状、惺窩先生

文集巻五）

※正月、異母弟甚性、仏門に入る。

○二月一日、以心崇伝とともに監督した金地院における古記録書写終了。（駿府記）

○二月二日、理斎追悼のため、昕叔顕晫が羅山を訪問する。（鹿苑日録）

○三月十九日、駿府に赴き、古記録書写完成を家康に報告する。（徳川実紀、右文故事、辻善之助『日本仏教史近世篇之二』岩波書店、一九五三年）

○三月二十一日、家康から以心崇伝とともに『群書治要』『大蔵一覧』を開板するよう命ぜられる。（年譜、行状、徳川実紀、駿府記）

以後六月までの経過は『本光国師日記』に詳しい。〔川瀬〕

※四月六日、大阪夏の陣、始まる。（羅山は駿府在）

○六月晦日、二条城において『大蔵一覧』を家康に進献する。（年譜、行状、徳川実紀、駿府記、右文故事）

△閏六月九日、『本朝文粋』の欠巻を家康に進献する。（駿府記）〔堀〕

※七月七日、『武家諸法度』制定。

※七月十七日、『禁中並公家諸法度』制定。

○八月四日、家康に扈従して二条城を出発する。（年譜、行状、徳川実紀）

○八月五日から七日まで、水口において、家康に『論語』学而篇を進講する。（年譜、行状、丙辰紀行、駿府記、大日本史料一二―二二）

○八月二十三日、駿府到着。（年譜、行状）

※十二月二十二日、飛鳥井雅庸没。

□この年、『四書集註抄』を講述する。（刊本『大学抄』）〔大江文城『本邦四書訓点並に注解の史的研究』関書院、一九三五年〕

元和二年（一六一六）　三十四歳

◎正月十九日、家康から以心崇伝とともに『群書治要』刊行を命ぜられる。これに関して板倉勝重宛書簡を著す。（本光国師日記、右文故事、大日本史料一二―二三）

以後、六月までの経過は、『本光国師日記』に詳しい。〔川瀬〕

板倉勝重は、京都所司代。大阪の陣に功績があった。

○正月二十一日、徳川家康が病気の為、営中にて待機。（年譜、行状）

○二月二十三日、駿府城三の丸にて『群書治要』印行開始。（右文故事、大日本史料一二―二三）〔川瀬〕

◎四月十一日、駿河文庫の書籍処分について家康の命を受ける。（寛政重修諸家譜、大日本史料一二―二四）

◎四月十七日、徳川家康没。「元和二年四月事記」あり。（年譜、行状、別集一）〔堀〕

○四月十九日、久能山登山、神廟を拝する。そののち江戸へ戻る。（年譜、行状）

◎五月下旬、『群書治要』完成。（右文故事）〔川瀬〕

○十月、次男長吉誕生。（年譜、行状）

◎十月下旬、駿府にて、駿河文庫の書籍を、江戸・尾張・紀伊・水戸に四分割する。（年譜、行状、駿河御譲御書物

目録、右文故事、好書故事、大日本史料一二―二四）〔堀、新村出「家康公の図書事業」（大阪毎日新聞、一九一五年。『全集』第九巻）、森潤三郎『紅葉山文庫と書物奉行』（昭和書房、一九三三年）、川瀬一馬「駿河御譲本之研究」（『日本書誌学之研究』講談社、一九四三年）、名古屋市鶴舞中央図書館『蓬左文庫駿河御譲本目録』一九六二年〕

◎十一月、江戸出発、京都到着。『丙辰紀行』の旅。（年譜、行状、詩集一・二、外集六）〔ドナルド・キーン『百代の過客』下（朝日選書、一九八四年）、鈴木健一「丙辰紀行」（『古典の事典』第七巻、河出書房新社、一九八六年）〕

『丙辰紀行』には単独の写本・刊本もある。また翻刻は、『続群書類従』第十八巻下・『日本儒林叢書』第三巻・『有朋堂文庫　日記紀行集』などに備わる。

浅井了意の『東海道名所記』にも影響を与えていることについては、岸得蔵『仮名草子と西鶴』（成文堂、一九七四年）が詳述する。また、後世の影響という点では、鈴木健一「林羅山の漢詩文一面」（解釈と鑑賞、一九九二年三月）参照。

○十二月十一日、堀正意（杏庵）席にて詩あり。（詩集三〇・三一九）

○十二月二十七日、「題琅邪代醉首巻後」を著す。（文集五四・六四二）

○十二月下旬、「贈石川丈山」を著す。（文集六・五八、残稿八）〔小川〕

□この年、「題欹器図後」を著す。（文集五一・五九七）

□この年、李白の「大鵬賦」を読み、また韓愈「仏骨表」を読んで詩あり。（詩集三二・三五一）

□この年、瀟湘八景題にて詩あり。（詩集六二・六一八）

□この年、詩あり。（詩集三〇・三一九、七四・七四四）

元和三年（一六一七）　三十五歳

△正月一日、以下の人物の歳旦詩歌に和す。

金子祇景　（詩集一二・一四三、残稿一二）

堀　正意（杏庵）（詩集一五・一六〇、残稿三、残稿九）

菅　玄東（得庵）（詩集一五・一六二、残稿三）

那波道円（活所）（詩集一五・一六四、残稿三）

石川山材（丈山）（詩集一六・一六九、残稿三）〔小川〕

金子祇景は京都の人。板倉勝重・重宗に仕えた。

丈山への和詩三首のうち二首を以下に掲げる。

宿梅御柳忽逢春　宿梅　御柳　忽ち春に逢ふ
多少功名世事新　多少の功名　世事新たなり
白眼青年何一様　白眼の青年　何ぞ一様ならん

麒麟楦上又麒麟　麒麟楦上　又麒麟

「麒麟楦」は仕官の人を嘲って言う語。「楦」は物の模型。

自笑羅浮山洞春　自づから笑ふ　羅浮山洞の春
東風依旧不清新　東風　旧に依って清新ならず
幾人天下学文字　幾人か　天下　文字を学ぶ

毛是如牛角如麟　毛は是れ牛の如く　角は麟の如し

○正月、「示永喜」詩あり。また永喜の昨冬の和歌に和す。（詩集三四・三六七）〔堀〕

聞説人心易覆傾　聞説く　人心　覆傾し易しと
君門千転幾時平　君門　千転　幾時か平かならん
士龍莫向舟中笑　士龍　舟中に向かって笑ふことなかれ
世上風波不可行　世上の風波　行くべからず

これは、秀忠の不興を買った永喜を戒め、同時に宮仕えの辛さを嘆いたものである。

○二月十三日、那波道円（活所）に対して贈詩、堀杏庵に書翰を送る。（詩集七・一〇〇、残稿一二）

○二月中旬、『五山文編』完成、「五山文編序」を著す。（文集五〇・五八七）

内閣文庫に単独の写本あり。

○三月十六日、江戸到着。（年譜、行状）

○三月二十一日、本光国師宛書簡、本光国師の許へ着く。（本光国師日記）〔堀〕

※三月二十八日、今出川晴季没。

○春、紹元宅にて詩あり。（詩集二七・二八六）

○四月一日、嶋田利正の和歌に和す。（詩集二一・二二八、残稿一二）

※四月八日、家康を久能山から日光へ改葬する。

○四月十二日、秀忠に扈従して日光に赴く。道中、西洞院時慶・時興父子との唱和あり。（年譜、行状、詩集四・四二、残稿一二）

◎このころ、「二荒山神伝」を著す。（年譜、行状、文集三七・四一一）
宮内庁書陵部・東京大学総合図書館・無窮会図書館神習文庫などに単独の写本あり。翻刻が『神道大系』神社編第三十一巻に備わる。
○六月二日、江戸出発、京都へ向かう。（年譜、行状）
○七月二十日、金地院（以心崇伝）・知足院・文殊院（応昌）とともに義演を訪問する。（義演准后日記）〔堀〕
応昌は高野山文珠院に住したのち、高野山興山寺三世となる。勢誉の弟子。連歌をよくし、里村家とも親しかった。
義演は真言宗僧侶、三宝院門跡三十二世。元和二年には徳川家康の病気平癒を祈った。『義演准后日記』は著名。
※八月二十六日、伏見城において朝鮮使節が秀忠に拝謁する。
※八月二十六日、後陽成院没。
○九月四日、伏見城における朝鮮使節への返簡をめぐる協議の末席に加わる。（異国日記）〔堀〕
◎このころ、朝鮮使節の滞京中の行動を記した「朝鮮信使来貢記」を著す。（文集二二・二四八）〔堀〕
単独の写本が、内閣文庫・東北大学附属図書館狩野文庫などに存する。
※九月十三日、秀忠東下。
○九月上旬、黒田筑州刺吏（長政）の求めに応じて「東鑑考」を著す。（文集六三・七六三）〔宇野〕
黒田長政は、福岡藩主。豊臣秀吉に従い転戦、朝鮮出兵での功績はよく知られる。関ヶ原の戦では徳川家康に従った。
○九月晦日、阿波へ赴く玄叔に贈詩。（詩集三七・四一〇、残稿一二）

○十月十五日から二十八日まで、「万首唐人絶句跋」を著す。（文集五四・六三七、内閣文庫蔵本）〔長沢〕
○十一月十九日、堀正意（杏庵）第にて詩あり。（詩集五〇・五三六）
○十一月二十七日、木下長嘯子亭にて詩あり。（詩集七・一〇〇）
○十一月、那波道円（活所）の求めに応じて『新刊倭名抄』巻首掲載のために「源順伝」を著す。（文集三七・四二八）
○十一月、木下長嘯子亭にて詩あり。（詩集六一・六一七）
○冬、江戸に向かうため京都出発。（年譜、行状）「出洛」詩あり。（詩集一・一〇）

詩は以下の通りである。

辺雁何時帰洛陽　辺雁　何れの時か　洛陽に帰らん
出門稚子曳吾裳　門を出づれば　稚子　吾が裳を曳く
東関千里莫云遠　東関　千里　遠しと云ふこと莫かれ
五十長亭是故郷　五十の長亭　是れ故郷

○冬、詩あり。（詩集二八・二九三、残稿一二）
◎この年、石川丈山を藤原惺窩に紹介する。（石川丈山先生年譜）〔小川〕
□この年、斥鷃子の詩に惺窩が和し、羅山もまた和す。（詩集三五・三八〇、残稿一二）

元和四年（一六一八）　三十六歳

○正月一日、歳旦詩あり。（詩集一一・一三一、残稿一二）

△正月一日、以下の人物の歳旦詩歌に和す。

三宅正堅（澹庵）（詩集一五・一六五、残稿一二）

三宅澹庵は儒医。堀杏庵に学ぶ。桑名藩儒。嶋中道則「『澹庵歌話』解題と翻刻」（国文学研究資料館文献資料部調査研究報告、一九八五年三月）

○正月、「老子口義跋」を著す。（文集五四・六三一）〔芳賀幸四郎『中世禅林に於ける学問及び文学に関する研究』（日本学術振興会、一九五六年）、住吉朋彦「不二和尚岐陽方秀の学績」（書陵部紀要、一九九六年三月）〕

○三月三日、阿部備中守（正次）庭前にて詩あり。（詩集五一・五四九、残稿一二）

阿部正次は、大坂城代、大多喜・小田原・岩槻藩主を歴任した。家康から家光まで仕える。

○三月七日、『経書要語』成る。（内閣文庫蔵写本）

内閣本には享保元年林信篤の奥書あり。林信篤は号鳳岡。鵞峰次男、羅山孫。大学頭。

○閏三月、『小学集説』に手識する。〔川瀬〕

○春、詩あり。（詩集五〇・五三七、五五・五七〇）

○五月一日、「題倭名抄後」を著す。（文集五五・六四四）

○五月二十九日、三男春勝（鵞峰）、京都にて誕生。（年譜、行状）

○五月、永喜外族布施氏没、追悼詩文あり。（詩集四〇・四三三、残稿一二、外集七）

○五月、「送武田道安序」を著す。（文集四九・五六九、残稿一二）

武田道安は京都の人。のち官医となり、法印に叙せられる。

○夏、詩あり。（詩集五一・五五二、五四・五六三、五六・五七七、五七・五八一）

○夏、石川殿中監君の芍薬の根を分けてもらい、贈詩。（詩集五一・五五四）

○七月七日、詩文あり。（詩集二二・二三三、残稿一二、外集七）

○七月二十一日から八月八日まで、那波道円（活所）から贈られた『白氏文集』に加点する。「白氏文集跋」あり。（文集五四・六三五）〔堀、金子彦二郎「林羅山と白氏文集」（文学論輯、一九五四年十一月）〕

○八月四日、那波道円（活所）の詩に和す。（残稿一二）

○八月十日、肥後藩内紛に関する訴訟を秀忠が聴問する場に列席する。（寛政重修諸家譜／阿部正之の項、大日本史料一二―二九）〔堀〕

○八月十四日、詩あり。〔詩集二五・二六四、残稿一二〕

○八月十五日、詩あり。それに対して方広寺鐘銘事件により当時駿府に拘留されていた文英清韓が和す。さらに贈答あり。（詩集二三・二五一、残稿一二、詩集四六・五〇二）

○八月十六日、詩あり。（詩集二五・二六五、残稿一二）

○八月、那波道円（活所）の詩に和す。（詩集四四・四七七、残稿一二）

○秋、詩あり。（詩集七・一〇一、二七・二八七、五四・五六二、五五・五七二）

○秋、円（及円）・堅（三宅正堅）・哲に贈詩。また再び同韻にて及円に贈詩。（詩集四四・四七七、残稿一二）

○十一月、文英清韓の詩に和す。（詩集四六・五〇二）

○十一月、京都に戻る。（年譜・行状）

在京中しばしば惺窩に会う。ある日、惺窩が羅山を激賞する。（年譜、行状）

○十一月中旬、「題琅邪代酔末巻後」を著す。（文集五四・六四二、内閣文庫蔵本）〔長沢〕

○十二月、「岷峨集序呈惺窩先生并詩」を著す。（文集四八・五六一、残稿一二）

○冬、詩あり。（詩集二八・二九三）

○冬、「明皇楊妃並笛図」詩あり。（詩集六八・六八七、残稿一〇）

□この年、江戸にて宅地を神田鷹匠町に賜わる。しばしば秀忠の御前に侍る。（年譜、行状）

□この年、晫長老（昕叔顕晫）・石川山材（丈山）・及円・那波道円（活所）・宗因らの送別詩に和す。（詩集三七・四一〇、残稿一二）

□この年「神武天皇論」「綏靖天皇論」「懿徳天皇論」「孝霊天皇論」「開化天皇論」を著す。（文集二五・二八〇）

「按ずるに、先生常に国史を修せんと欲するの志有り。誠に此の論を作る。然るも、文献足らず。且つ宇多・醍醐以後実録無くして稗史小説の記する、疑ふべき者の多し。未だ討論に逞しうあらず。故に其の志遂げずして罷みぬ」（文集二五・二八六）

□この年、「四書集註点本跋」を著す。（文集五四・六三一）

□この年、「五柳先生伝」を読んで詩あり。（詩集三二・三五一）（松下忠『江戸時代の詩風と詩論』明治書院、一九六九年）

劉伶沈湎屈原醒　劉伶は沈湎し　屈原は醒む

遠害憂君陶性霊　害を遠ざけ　君を憂れひて　性霊を陶す

一酔一醒俱在此　一酔一醒　俱に此に在り
門前依旧柳青青　門前　旧に依りて　柳青青

□この年、那波道円（活所）の詩に和す。（詩集三五・三九〇、四四・四七七、残稿一二）
□この年、「別人」詩あり。（詩集三七・四一一）
□この年、江戸から西国へ戻る清水久蔵新郎へ贈詩。（詩集三七・四一一、残稿一二）
□この年、那波道円（活所）・三宅正堅（澹庵）の留別詩に和す。（詩集三七・四一一）
□この年、堀杏庵『東行紀行』中の詩に和して、三宅正堅（澹庵）に示す。（詩集四四・四七六、残稿一二）
□この年、三宅正堅（澹庵）の詩に和す。（詩集四四・四七七、残稿一二）
□この年、勧学の詩を堅（三宅正堅／澹庵）・哲に贈る。（詩集四四・四七八）
□この年、某の詩に和して、本庵宗務に寄す。（詩集四四・四七八、残稿一二）
□この年、黄魯直の艶詩の例に效って詩あり。（特集四四・四七八、残稿一二）
□この年、「寄山中錬師」あり。（詩集四四・四七八）
□この年、石川山材（丈山）に贈詩。（詩集四五・四八五、残稿一二）
□この年、題画詩あり。（詩集六七・六七九、六八・六八五、六八・六八七、七〇・七〇五、七〇・七一九、残稿一二）
□この年、詩あり。（詩集一〇・一二六、一〇・一二九、七四・七四五）
□この年、「十不能詩」あり。（詩集七四・七四五、残稿一二）
□この年、「二人同会一少年」と聞き、戯れに寄せる詩あり。（残稿一二、別集一）